
群青星雲

はじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

群青星雲

【コード】

N8975P

【作者名】

はじ

【あらすじ】

暑い夏。青い空と、黒いアスファルト。僕は妹と手を繋ぎながらアイスを買に行った。

夏が来た。

からと違って騒ぎ立てるような歳ではもつないが、それでも夏という季節が来ると胸の中に連綿と続く青い空と、コバルトブルーに煌めく海が広がる気持ちになる。

それは果てしないほど爽快で、僕が抱える悩みごとなんてとても小さなものに思えてくる。

蒼々とした青が、僕の胸の中を埋め尽くす。

遙か頭上の青空に昂然と浮かぶ太陽。その熱線が僕の旋風を焦がそうと躍起になっている。じりじりと焼けるような刺激を頭頂部に感じながら、僕は妹の手を引き『あおほし』を目指した。焦げついたアスファルトが照り返し世界はいつもより淡く見えた。

苛立ちが募る太陽。煩わしいセミの合唱。頬を伝う嫌な汗。

そう。どんなに清涼感あふれるイメージを抱こうとも、夏は暑い。

八月十五日。夏真只中。

液晶なんて単語が存在していないのではないかと疑ってしまうくらい、僕の家テレビは図太くて四角い。中に人が潜んでいそうな箱には、向日葵のような笑顔を振り撒いているお天気お姉さんが映し出されていて、今日は今夏一番の暑さであることを告げている。

夏は暑いものだろう、それが夏だろう、と僕は寝そべりながら頭の軽いツツコミをお天気お姉さんに入れていた。

吹き出す汗で目を覚ます、というなんとも気分の悪い起床をして茹だるような暑さの中になにもする気が起きるはずもなく、僕は居間で溶けるように横になりながらテレビを見ていた。

『今日は今年一番の暑さです！』

と陽気な声でお天気お姉さんは、今日三度目となるセリフを嬉しそうに口にした。

暑くて嬉しいのはアイス売りだけだ。夏が来ればアイス屋が儲かる。

チリン

僕の思いに呼応したかのように風鈴の音が虚しくなった。

この家の冷房器具といえばオンボロ扇風機だけなのだが 生憎、その扇風機は昨夜妹が破壊してしまった。今は部屋の隅でオブジェクトと化し、この家のみすばらしくさせるのに一躍買っている。

そして、この家で唯一の冷房器具として期待できるもといえれば先ほどから縁側に吊られ、風が吹くたびに揺れて音を発している風鈴だけである。この音色だけが暑さを凌ぐ道具なのだ。

「兄さん」

「ん？」

寝そべったまま視線を上げると、件の扇風機を完膚なきまでに破壊した妹がいた。冷たい視線で僕を見下ろしている。その目線だけで温度が一度低くなった気がする。

「わたしは暑いです」

機械的な口調で僕に暑さを訴えてくる。僕は少し怒気をこめた声で返す。

「暑いのはお前が扇風機を壊したからだ」

無言。

風鈴が『ちりん』と音を立てより物寂しさが増した。

僕の的確過ぎる指摘を澄ました顔で聞き流す。暑さの所為か、妹の冷たさの所為か。無性に腹が立った。

「兄さん」

先ほどの仕返しとばかりに僕も黙りを決め込む。

「わたしはアイスが食べたいです」

無視する。

「兄さん」

無視。

「チッ」

「舌打ちしたる今！」

身を起こし妹に顔を寄せ怒鳴りつける。

「していません。良い塩梅で舌が鳴っただけです」

「そ・れ・を！ 舌打ちと言うんだ！」

「そうですね」と妹は賺した顔をした。

こいつまだ低学年だというのに、なんでこんなに諦観しきっているんだよ。

どこか不満を感じながらも僕は妹の手を握った。妹の小さな手が握り返す。

玄関で妹に靴を履かせドアを開く。今年一番の熱気が顔に襲い掛かってきて、外出しようとする気持ちを根こそぎ奪っていった。聞こえないくらい小さな溜息を吐き、僕は凜然と横にいる妹に目を向けた。妹も僕を見ていた。綺麗な瞳だった。夏空のように混り気が一切ない、純粹で綺麗な瞳。

僕は妹の手を引いて外に出る。ポケットから家の鍵を取り出し、軋む木戸に施錠をした。

「行くよ」

「はい」

短いやり取りをして僕は妹を牽引して歩き始める。

僕と妹が目指しているのは『あおほし』という近所の駄菓子屋。

創業五十年とも百年とも言われている老舗である。百年はさすがに嘘であると思うが、確かに五十年前にはあった、と近所に住まう老人が語っていた。

『あおほし』には昔ながらの駄菓子から最近流行のお菓子まで幅広いジャンルの商品が置かれていて、子供たちの格好の溜まり場となっている。

僕は額から垂れてきた汗を拭い、馬鹿にでかい麦わら帽子をゆさゆさと揺らしながら歩く妹を見た。無表情が顔にへばり付いていたが、その頬には数滴の汗が浮かんでいる。

「暑いか？」と聞きながら僕は足を止め妹の汗を拭ってやる。妹

はその無表情を崩さず「暑いです」と返した。

なら暑いのだろう。

全方位から集中砲火のように浴びせられるセミの声。最初は疎ましかったが、次第に耳も順応を始めて夏の音色の一部へと変わっていく。太陽の光を照り返すアスファルトが眩しくて目を細めた。十メートル先が屋気楼のようにゆらりゆらりと歪んで見える。

ふ、と昨日大きな買い物をしたことを思い出し、僕は財布の中身を調べた。

三枚の硬貨　百二十円。

アイス一本程度なら何とか買えるだろう。僕はほつとして胸を撫で下ろした。

「兄さん、どうかしましたか？」

彼女の透き通った瞳には、どのような景色が見えているのだろう。

「んー、何でもないぞ。それより」

僕は麦わら帽子の位置を直してやる。垂れてきた汗を自分で拭いたときにずれたのだろう。やはり妹の表情は崩れなかったが、ぼそぼそとした声で礼を呟いた。

やけに目に付く赤い屋根をした住宅の角を曲がる。やっと『あおほし』が姿を見せた。砂漠でオアシスに巡り合った気分だ。

妹にそのことを知らせてやると、少しだけ口元が緩んだように覗えた。ほんの少しだが。

僕は妹の歩調に合わせて歩く。蝸牛と良い勝負が出来そうなくらいの速度。

ようやく『あおほし』に着く。

重さの感じられないくらいの薄い戸をスライドさせ、店の中へ入った。

中に入れば暑さが幾分かましになると思ったが、外界とそれほどの変化を感じられない。寧ろ蒸し暑さが増してより不快になったように思えた。

色鮮やかな菓子の包装たちが店中の壁を覆っていて、いつ来ても目が回りそうになる。

妹の汗を拭いたあと、僕は店の奥へと声を張り上げて叫ぶ。

「おっさん、客が来たぞー」

すると、店の奥の扉が開いて仏頂面をしたおっさんが現れた。「なんだお前らか」と目の下に皺を作り、商売人としては最悪の言葉を吐いてそのまま縁側へと腰を据えた。

大仰な欠伸をするおっさんを尻目に、店の隅にちんまりと置かれたアイスボックスへと向かった。ボックスの隙間から流れ出る冷気で、暑さが幾分か和らいだように感じる。

汗ばんだ妹の手を離し、ボックスのフタをスライドさせ、開けた。溢れ出る冷気の心地よさに思わず脱力しそうになる。

「どんなアイスがいいんだ？」

僕は妹に訊ねた。

妹はボックスの中に視線をやることもなく、僕を見上げた姿勢のままアイスみたいに冷たい声で呟いた。

「一番安いもので結構です」

そう言って帽子の位置をぐしぐしと直した。僕はボックスの中に手を入れて、青い包装に包まれたアイスを取り出す。

「おっさん、これ何円？」

包装の端を摘みぶらぶらと揺らし、おっさんにアイスを見せる。

おっさんは目を眇め、「百円」としわしわの手のひらを差し出した。口の隙間から金歯が覗いていた。

僕はその手のひらに硬貨を一枚置き、ニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべた店主のいる店をあとにした。

再び照りつけて来る太陽に目を細め、僕は心の中で思いつく限りの罵声を浴びせた。

横でじっと待っていた妹の手に、包装を取り去った水色のアイス握らせてやった。妹はただどどしい手付きでそれを取る。

「ここで食べてると暑いから、食べながら帰るぞ」

妹がこくりと頷いたのを見て、僕はアイスの握られていない方の手を掴んで歩き出す。

一心不乱にアイスを舐めている妹の歩調はいつも以上に遅い。これではナメクジにも負けるだろう。

夏。

暑い、夏。

こんな暑い日は外に出たくなかったが、たまにはこんな日があってもいいのかもしれない。

青空に白く茫洋と燃え続ける太陽も、儂い存在を誇示するかのようになめき散らしているセミの声も、滝のように轟々と流れ頬を伝う汗も

すべて、夏だけのものだ。

夏という季節でしか味わうことのできない、大切なものたち。

でも、夏が過ぎれば忘れてしまふ、儂いものたち。

家が見えてきたところで腕が後ろに引かれ、僕は前につんのめった。

振り返ると、妹が歩みを止め俯いていた。大きな麦わら帽子の所為で、その表情は見えない。

僕は怪訝に思い「どうした？」と訊ねる。妹は無言で小さな手を差し出した。

「兄さん、どうぞ。食べてください」

妹の手には、アイスの棒だけが握られていた。

僕は眼前に突き出された棒から視線をずらし、妹の後ろ　僕たちが歩いてきた道をのぞき見た。

干乾び黒々としたアスファルトには、水色の雫が点々と、まるで青い星のように続いていた。

もう一度、小さな手が握った棒を見た。

そこに、水色のアイスはない。
麦わら帽子の下にある瞳は、空のように透き通っている。

高くて、深くて。

広くて、大きくて。

届きそうなのに、届かなくて。

空はいつでも空にあるのに。

見上げる空に、僕はいない。

妹の瞳に、僕はいない。

「ああ、ありがとう」

そう言っただけは、妹の小さな手から棒を抜き取り　見えないア
イスを舐めた。

勿論、味なんてしなかった。

でも少し　少しだけ、しょっぱかった。

「ありがとう、美味しかったよ」

僕は再び妹の手を引いて歩き出す。着いてくる妹の口元は僅かに
上がっていて、何だか満足そうに見えた。

「兄さん　ありがとうございます」

僕は聞こえなかった振りをして歩き続ける。

僕たちの歩いてきた道には、きっとソーダ味の星々が点々と続い
ているのだろう。

黒いアスファルトの宇宙の中。

星たちは青々とした光を発して輝き続ける。

いずれ、消えてしまう運命だとしても。

(後書き)

夏をイメージして書きました。

読んだ人それぞれが好きのように解釈してくれればいいと思います。

感想、意見、アドバイス等ありましたら是非お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8975p/>

群青星雲

2011年10月8日13時50分発行